

古く見えてゐる一番始めが、この鶴鷓草葺不合尊の御誕生の時です。日本書記に「彦火々出見尊、婦人を取りて、乳母、湯母及び飯嚼、湯坐としたまふ、すべて諸部備行て養し奉る。時に權に他姫婦を用りて皇子を乳養し奉る、これ世に乳母を取りて兒を養す縁なり（漢文）とありまして、この時これらの役目をつとめましたものは、みな婦人と見えます。また、世に乳母を取りて兒を養ふ風習はここに始まりたるやうに記してありますけれど、これはたゞ特別の事があつてここにわらはれたまでい、その實際は、もつと古くよりあつたこととは申すまでもありません。（つゞく）



寄書

お寺参りの婦人と子供（承前）

岩手 凹 凸 子

前の地獄の繪圖で、盗み食ひをすると、鬼どもが集まつて居て目方にかける、さうするとどんなにかくしても隠し切れないでとうとう分つて仕舞ふと、お寺まわりのある白髪のお婆さんがいひますと、側に聞いて居た菓子屋の「悟」という五つ六つになるのが、いかにもこわさうに口をひらひて「それでは、之れからは、お菓子を盗つて食はないわ……お前も……よ」と並んで居たもの、肩をたゝきました。この肩をたゝかれたのは、矢張り

同じ菓子屋の子供なので、この「悟」には弟であつたのです。

また悪い事をする、死んでから地獄にやられるし、善い事をする、あんな花が咲いたり、鳥がいたりする面白い極樂にやられると、和尚さんがいひますと、前の白髪のお婆さんに連れられて来た少女の子はお婆さんの顔をながめて「お婆さん……夫れではあの先達死んだ姉さんも地獄にいつて鬼にせめられて居るの……をらいやだ……」とまだ言ひ終らないに早や涙ぐみました。

このお婆さんのうちではこの頃不幸があつたのです、お婆さんはさも氣の毒さうな顔をして「姉さんは、わるい事をしなかつたから極樂にいつたのよ……」と方なささうに孫の顔に手をかけますと「だつてお婆さん……姉さんは私と喧嘩をした

事があつたんだもの」となは聲高かに泣きだししました、かういはれてお婆さんも答へに窮したらしく、また側に居た子どもたち、私もその一人でしたが、なるほどとその女の子に引かされて、又泣きたくなつたほどでありました。するとさすがは衆生濟度の和尚さんだけ、なか／＼すかしませぬ「坊ちゃん……夫れではね、私は姉さんが地獄にいかないやうに拜んであげよ……かとなしくして坊ちゃんも拜みなさい……」と例の數珠をとつて何やら唱へますと、坊ちゃんも泣きをやめて和尚さんのまねをしました、やがて唱へが終つてから、またお婆さんにすゝり泣きをしなから「姉さんは、極樂にいつたの……」お婆さんもうれしさうに「さうよ……今和尚さんが拜んでくれたから、今ごろは極樂へいつたのよ……」

坊はうれしさにまたもとの笑顔にもどりました、その時側に見て居つた小供らは、悪い事をしても、和尚さんを頼めば、極樂へいかれるものであるといふやうな、いはゞつまらない考へを起こしたらしい、私などはその時實際さういふ風にかへたのでありました、之れは今から考へて見ますると、少しく遺憾な點でありますが、こゝを今少しうまくやられたなら、いくら功験があつたらうかと、いと残念に思はれます、さて世のご婦人方は、今この菓子屋の「悟」と、老婆に連れられた女の子について、いかなる考へを起されなさいましたか、たとへ菓子を取つて食ふのは、小供の所謂自動性であつて、毫もとがひべき點でないとした所で、この悟兄弟は、再び菓子を盗つて食ひましたらうか、又彼の老婆は、その孫の養育上いかに

に地獄繪圖を以て訓誡せられたでありましたよーか否實際この孫のためいかに功験があつたでありましたよーか、これは諸君方のご判断で充分想像のつく所だらうと思ひます。

今私はお寺まゐりのをばなしを致しましたが、之れは私の子どもの時を想ひ出してかういふ事もありましたよと紹介するに過ぎないのでありますが、みなさんも自分の子どもの時を追想されて、小供といふものはかういうことに氣を引かれるものであるとか、或はかういうとさにはかういう感じをおこすものであるとかいうやうなことを自ら省られて、それを實際に應用することが、頗ぶる肝要な事であらうと思ひます。殊にお寺参りをされるときなどには、大抵修身上のたすけとなる材料は數多いので、又實際にさゝめのあることも

非常に多からうと信じて居ります。で私は私の小
供のとき、お寺まゐりに連れていかれたその當時
所謂小供心に感じました一節を擧げて、みなさん
の子どもを教へ導かるゝ参考に供することかくの
如くでございます。

(完)

母と子と繼母 (承前)

林 壽 祐

余は幸にして父母共に健全なるも余が父、祖父
及び其弟妹等は幼にして母に後れ、繼母に督せら
れ備さに辛酸を嘗む、親族中にも母を失ひ往々悲
哀の境遇に沈みし者少からず、其言を聞くに皆符
を合すが如し。釣落したる魚は實物より遙か大く
思はるゝ如く、母存生せるときは左程に思はざり
しも母の逝かれた後には一層難有思はるゝなり、

往々憂きにつらさに遇ふ時は「嗚呼母が生きて居
るならば……」の嘆息を發せらるゝ事幾度ぞ。

四十八

母に後れたる子は唯にてさへ困難するに、まし
て意地悪しき繼母に遭遇せんか、其艱難といふも
のは一通りや二通りの騒ぎに非らざるなり。予の
親族に暴れ坊あり活潑にして物に頓着せざる性な
るが、一日言會々彼が亡母に及びし時彼は涙に眼
をうるませ、物をも言はず頗るしよけかへりたり
蓋し繼母と繼子は常に親睦し難く、互に猜疑を起
し一言一動に角をたて、欠點を拾合ひ針程の事を
棒程に擔き出し恰も仇敵の如くなるを常とす、是
を以て性質強剛なる者は漸々と悪性に曲向し、柔
弱なるものは恐々慄々憂鬱の餘り神經病を惹起し
あつたら此月日を不愉快に徒費するものあるに至
る。彼の惘然なる狂人の如きは比較的親なし子に